

昨年末二〇〇八年九月一二月、古今書院から自然公園シリーズ三部作として、(一)渡辺悌二編「登山道の保全と管理」、(二)小林昭裕・愛甲哲也編「利用者の行動と体験」ならびに(三)加藤峰夫著「国立公園の法と制度」が発刊された。近年、山岳自然公園では、中高山登山ブーム・百名山ブームなどの利用が従来にもまして顕著になり、それに伴い、登山道の荒廃やキャンプ地周辺の踏みつけ・トイレ問題など、利用圧による自然の荒廃が問題視されている。上記三部作は、この点で「読むべき図書」としてここに紹介する。

それぞれの前書きを読むと、三部作が出来上がった背景と目標は、以下にある。一九八九年、北大の「大雪山プロジェクト(代表・小野有五)」として地理学・造園学・法学などの研究者が集い、大雪山国立公園の過剰利用と自然荒廃の実態把握、その解決に向けた科学的アプローチの検証に関する研究を始めた。他方、環境省では、自然公園の適正利用(利用と管理)に関するいくつかの検討委員会を設けたが、上記研究者の多くが委員として参加し、大雪山国立公園を中心とした多数の研究成果を検討材料として議論に活かしてきた。この三部作は、将来に向けて、山岳自然公園の適正利用推進を目指している。

(一)「登山道の保全と管理」は、第一部・登山道問題の背景と課題(二章)、第二部・登山道荒廃と登山道に関する調査・研究方法(八章)、第三部・維持管理のための工法(三章)、第四部・新しい維持管理の考え方とその実践(三章)から構成され、合計一六名の研究者によって分担執筆されている。この図書は、社会科学的研究が第四部にまとめられ、植生への影響研究が第三部に一章とされているが、全体的には登山道の実態を自然地理学(地形学・気候学)的に分析した研究が主となっている。

(二)「利用者の行動と体験」は、第一部・自然公園

で起きている問題(三章)、第二部・登山者の数と動きをとらえる(四章)、第三部・登山者の心理と評価をとらえる(五章)、第四部・自然と利用に配慮した公園計画と管理手法(四章)から構成され、これも合計一六名の分担執筆によっている。この図書は、自然公園の適正利用について、社会科学的アプローチから多面的な分析研究をまとめている。

(三)「国立公園の法と制度」もまた、社会科学(法学的研究となるが、加藤氏の長年の研究に基づいて、国立公園の実態と将来に向けた課題について詳細に論述している。

山岳自然公園における利用の実態とそれが引き起こす問題について、現在まで社会科学的研究のアプローチからの研究が非常に少なかった。そのため、二〇年以上にわたる多くの研究成果がこのシリーズにまとめられ、皆で考える科学的根拠を示したことは素晴らしい。

他方、この三部作の中で「生物など自然に関する科学的研究が進んでいる」との記述があるが、重要な保護地域である自然公園において、生物多様性の荒廃などの実態把握と保護策に関する応用研究は決して進んでいない。高山生態系は、多様な生育地・生息地を揃えて多種類の生物の生活を支えているが、それぞれの生育地・生息地の環境が極めて小面積でモザイクを形成する場合が多いため、希少種が生活する小面積が登山道の位置と重なる場合も少なくない。したがって、高山における生物多様性への影響に関する応用研究・保護研究についても、別途、しかし、このシリーズのように多数の研究者による共同研究として、進めなければならない。高山植物を研究する者としてそのような自省を感じる。さらに、本シリーズ四作目「山岳自然公園における生物多様性の現状と課題」を待ち望み、今回の三部作とそれが照合されるならば、より良い適正利用を考えることができよう。